

大平さんの英語

村松 増美

大平さん 敬愛の念をこめて、あえて大平総理ではなく大平さんと呼ばせて頂きます と初めてお目にかかったのは、一九六二年（昭和三七年）、大平さんが外相のとき、ワシントンで第二回日米貿易経済合同委員会（閣僚会議）が開かれたときでした。前年、箱根で第一回会議が開かれたのに次ぐもので、米国内務省の提案で日英語間の同時通訳が行われましたが、これが日米の政府間会議で初めて同時通訳が用いられたときです。

その後、通産相、再び外相、そして蔵相、さらに首相としての大平さんに、世界各地での先進国首脳会議（サミット）や、IMF・世界銀行蔵相会議や、国連貿易開発会議（UNCTAD）、訪米、豪州・ニュージーランド訪問などにも随行、通訳を務めさせて頂きました。

世間では「アー、ウーの大平さん」などと言われましたが、実は「アー」とか「ウー」とかの間には、熟慮された含蓄に言ひ言葉がぎっしりと詰まっております、内容の濃いスピーチをいつもなさいました。通訳しているとき、特に同時通訳ですと、「アー」や「ウー」と大平さんが言っておられる間は、次に何が来るか全身を神経にしていなければなりません。挑戦ではありますが、通訳者としては誠にやり甲斐のある仕事でした。

たとえば一九七九年、マニラでUNCTADの際の記者会見で、フィリピンの記者の質問に答えて、

「われわれは花鳥風月を愛する、自然を愛する民族です……江戸には『宵越しの金は持たぬ』ということわざがあります……」と言われたり、東京の外国特派員協会での講演後の記者会見では、「日本の国際収支の黒字がふえているのは……昔から鴨川の流れと叡山の僧兵は、誰にも思うようにならない……」と答えられたり、月並な表現でなく、うまく日本的な味を英語で出せれば、外国の人たちにも興味深く日本の強調したいことを理解してくれるような、独創的な話し方をされたものでした。

自分をコケにするユーモア手法

ワシントンのナショナル・プレス・クラブで、日本が鯨を乱獲しているという、意地の悪い質問が出たときは、「日本は国際捕鯨委員会に加盟しておりまして……その協定に従って捕鯨をやっております……」と、一応、杓子定期的な答え方をされてから、照れ臭そうに頭をかきながら、「エー、鯨はあまり大きすぎて、私にはどうにもなりません」と、飾り気のない、譲るところは譲る、自分の弱点を笑いの材料に供する、つまり自分をコケにするユーモア (self-deprecating humor) という、「ミニニケーション」の手法として高級な語り口で聴き手を魅了しておられたのです。(これらの「大平節」を私がどう英訳したか、そしてどんな反響をよんだかについては、拙著『続・私も英語が話せなかった』と『だから英語は面白い』ともにサイマル出版会刊に詳しく記してあります。)

「自身で英語で演説をなさったときの大平さんの英語は、メリハリのきいた、堂々としたものでした。多少、日本人的な発音も当然ありましたが、意味を強調する上での抑揚や間のとおり方は極めて正確で、深い英語の読解力を示しており、十二分に誠実味と迫力のある語り方でした。一九六二年にワシントン国立空港で、当時のラスク國務長官の出迎えでの歓迎式の際には、挨拶原稿をいささか一本調子に棒読みされたのに比べると、相当の勉強と進歩の跡が拝察されました。

それというのも、大平さんは良い英文をいつも朗読練習しておられたからだと思います。ニューヨーク・タイムズ紙の社説や、名著の誉れ高いシオドア・ホワイトの『In Search of History』（『歴史の探究』）などを、よく声に出して読んでおられたものです。前述の空港での演説は、ラスク長官の挨拶を、当時、プロペラ機の爆音でうるさかったワシントン国立空港で、私が大きな声で通訳した直後だったため、地元新聞の若い記者が、私を日本の外相と、そして大平さんを英語を棒読みした通訳と勘違いして、あやうくそう記事に書かれそうになったという秘話もありました。それに比べて、後年の大平さんの英語は、顕著な進歩の跡があり、ご多忙中にもそれだけ勉強されていたに違いありません。

総理に就任されたとき、自民党幹事長時代に日本経済新聞の「私の履歴書」で語られたものを、私が監修して英語に翻訳し、サイマル出版会が編集制作し「Brush Strokes」の題名でまとめましたが、これは、訪米その他の際の広報資料になりました。またその革製の上製本は、各国首脳などに献呈されたので、大平さんの生い立ち、お人柄などを広く知って頂くのに、私もささやかながらお役に立てたことは光栄でした。

お人柄といえば、外交の上で大平さんの飾らない魅力が、とかく「顔の無い大国」と見られる日本のイメージを、暖かいものにし、好意的にわが国の声に耳を傾けてもらう上で、大層役に立った実例を、私は多く見て参りました。大平さんの最後の外遊のときにも、そのいくつかが記憶に鮮明に残っています。

オタワでの三度目の「エクスキューゼ・モワ！」

それは一九八〇年の外遊、つまりワシントンでのカーター大統領との首脳会談、そしてメキシコを訪問後オタワに飛び、カナダのトルドー首相と会談、さらにヴァンクーヴァーで同首相主催の晩餐会にのぞむ、という強行軍のときでした。私はメキシコの部分は休ませて頂き、米加両国訪問にお供をしました。

思えば海拔が高く気圧の低いメキシコ訪問も、ご疲労を深められた一因だったのでしよう。

カナダの首都オタワでの、連邦議会での演説は、同議会で英連邦加盟国首脳以外では異例のものでした。暖かい歓迎の雰囲気の中で、「私は本日は勇をふるって英語でご挨拶を申しあげます」と大平さんは切り出されました。議員たちは好意の耳を傾けます。「しかし残念ながら、フランス語は勉強してくる時間がありませんでした」と大平さんが続けると、みな笑い拍手が起りました。英仏両語を国語とするカナダのお国柄への配慮です。

そこで大平さんは、原稿の余白のメモを見ながら、フランス語で「お許しください Excusez-moi」と加えられたのですが、「エクス・キユウ・ゼモワ」と、ぎこちない発音になってしまいました。それでも、この友好的なゼスチュアは微笑と拍手で迎えられました。だが自分の発音に満足できなかった大平さんは、もう一度ゆっくりと「エクスキュ・ゼモワ」とやっただけです。出来上りはいまひとつでしたが、カナダの議員たちは、大平さんの意気をよしとして、盛んな拍手でこれを讃えました。

ところが大平さんは、今度こそ、とばかりもう一度試み、それが「エクスキュ・ゼ・モワ！」と見事にできたので、満場大喝采、大爆笑となったのです。照れ臭そうに眼を細めた大平さんが頭をかいたのは、ご想像通りです。この心暖まる情景は、次の二日間テレビで何回も放映され、カナダの国民も、日本の政治家にも人間の顔があることを発見し好意を感じてくれたに違いありません。

ヴァンクーヴァーでの居眠り覚まし

オタワから西へ飛び、太平洋岸ブリティッシュ・コロンビア州の首都ヴァンクーヴァーを訪れました。

ここはトルドー首相の政党にとっては政治的地盤が弱いところといわれ、首相は大平さんを紹介する演説の機会をとらえて、カナダの国内政治にいろいろとふれました。

この間、私は大宴会場の舞台の上につくられたヘッドテーブルの二人の首脳の間、少し下がった位置に座り、食事の中の両首脳の会話のときと同様、通訳を続けていました。同時通訳の一つのヴァリエーションで「ホイスバー」と呼ばれる、マイクやイヤフォンを使わずに、聞く人の耳元へ訳を直接ささやく方式で、「ちやちやき通訳」というわけです。

このとき大平さんは明らかに疲れがたまっておられました。ワシントン、メキシコシティ、オタワと三つの首都での首脳外交を済ませ、肩の荷も降りたのでしよう。私はトルドーさんの、あまり日本に関係ない話を、要領よく聞き易いような訳で大平さんの耳元にささやいていました。ところが、うなずいているかと思えた大平さんが、ときどきコックリと舟を漕ぎはじめたのです。高い演壇の上の席ですから、会場に集まった何百人かの人たちからは丸見えです。

こういうときに、さりげなく起こしてさしあげるのも、通訳者のできるサーピスのひとつです。背中をつつくのものはばかられ、私は大平さんの椅子の脚を、間違えたふりをして靴で軽くけりました。その振動で大平さんは目を覚まし、ふたたびトルドー演説にうなずきます。これが数回続きました。

ふと気がつくと、大平さんの左隣りに、カナダの間僚が座っており、なんと彼の右腕を大平さんの椅子の背に乗せ、大平さんの肩を抱くような形で、大平さん越しにトルドースピーチを聞いているのでした。つまり私が大平さんの椅子をけるたびに、このカナダ人に私のしていることが気づかれてしまいます。つまり、大平さんの居眠りを私が起こしているのがわかってしまいました。

一計を案じた私は、隣りに気づかれないように、椅子から腰を前にずらし、幸い私の椅子が少し低いので、私の片足のひざを大平さんの椅子の下にもぐらせ、ひざで大平さんのお尻を、椅子の裏から軽くけり上げたのです。

この試みは成功しました。でもまたコックリとなります。また軽くけります。四、五回は繰り返したで

しようか、大平さんは私のしていることに気づかれたのかも知れません。眼を覚ましてはスピーチにうなずく度に、なにか「村松さん、有難うよ」という意味も含まれているように、私には感じられたものです。さてトルドー首相の長い演説のあとで、主賓の大平さんの演説の番です。原稿は英文で準備され、いつものように大平さんは十分に朗読の練習を済ませておられます。当然ながら日本人らしい訛りはわずかにありますが、見事な抑揚なので、明快かつ迫力のある語り口でした。当時の地元の新聞に、「一生懸命に、しかし明快な」(“laboured but articulate”)英語で語った、と好意的に報じられました。

この機会に現地の大学に、日本政府からの五〇万ドルの寄付を発表することになっていました。ゆっくりと“I take pleasure in announcing my government's decision...”と大平さんは語ります。英語の語順で、*“to make a half million dollars' contribution to the Asian Studies Centre of the University of British Columbia over the next three years..”*「五〇万ドルの寄付を...」フリティッシュ・コロンビア大学のアジア研究センターに.....次の三年間にわたって.....」と続けました。

実は英文原稿としては、そのあとに“...for its Japan studies.”(その日本研究のために)という、いわばお金の使途に条件がつけられているのです。だが、ゆっくりと噛みしめるような大平さんのスピーチを聞いていた満場のカナダ人來客たちは、この最後の四語の直前に大平さんがひと息ついたときに、五〇万ドルに喜んで、条件を聞く前にみな拍手してしまっただけです。

「オフ・コース」というアドリブ能力

バツが悪そうに苦笑した大平さんは、そこで頭をかきながら、“Of course, it's for Japanese studies.”(もちろん日本研究のためです)とつけ加えられたのでした。この「オフ・コース」で救われたのです。

もし拍手のあとに機械的にあと四語をしゃべっても、聴き手は、まあ条件は当然だろうと思いながらも、ちよつと白けた感じを抱いたかもしれなかつたでしょう。

だが大平さんは、謙虚さと率直さと優雅さで、「オフ・コース」とアドリフで加えることにより、「いまのは私の言い違えですが」の感じを伝えられたのです。瞬間にこれができるのは、英語の運用能力に加えて、お人柄というものでしょう。自分の失敗を認めての、これも self-deprecating humor の一例ですが、器量のある人にしてはじめて可能な、たくまざるユーモアは、聴衆を喜ばせ、爆笑と大きな拍手がしばし続きました。そして寄付金の使途も、より明確に印象づけられたというわけです。

そして翌朝、当初の予定を変更して総理特別機は、ユーゴスラヴィアのチトー大統領の国葬に出席することになった大平さんと、関係随員たちを乗せてベオグラードへ発って行きました。私はじめ残りの随員一行は、民間機で東京へ帰りました。「国葬外交」もつとめられ間もなく帰国した大平さんを待っていたのは、国内政治の激動と、総選挙、そして街頭演説でした。

ヴァンクーヴァーで、トルドー首相の演説の間に、睡魔と闘っておられた大平さんの横顔、そして重荷を背負った背中が、私のまぶたに焼きついていきます。「矢張りベオグラードへは行かねばならんだろうな」、「総理、そうお願いします」という趣旨の会話があつたと、あとで知りました。思うだに、お気の毒でなりません。

永いこと、お疲れさまでした、大平さん。それにしても、居眠り防止のためとはいえ、一国の総理のお尻をけつたりして、誠に失礼いたしました。もうお起こししませんから、ゆっくりと、安らかにお眠り下さい。

合掌

(株)サイマル・インターナショナル会長)